

アビシニア國王に謁するの記 (二)

小 牧 實 繁

天氣は餘り宜敷くない。先刻も列車中で大雨に會ひ雷様にも見舞はれた次第である。獨り異國にある時、天氣のよくない程心細いものはない。雨と雷、之れは日本人には別段不思議のものではないが、若し今日之れなかりせば、初めてのアデス・アベバ入りは更に好印象を以てなされたであらうにと思ふと残念でたまらぬ。殊に雨の爲め赤土の道路が何だかじめく／＼して居て氣持が悪い。空も曇つて頭から腕でも被つた感じである。

旅館は希臘人の經營で、清楚とは云へず、要するに田舎旅館に過ぎないが、アデス・アベバでは一流の歐風旅館と云ひ、先づ先づ落着ける唯室が馬鹿に大きく、それに窓外の眺めも兎に角異様で、何だか鼠にでも引かれ相な氣がしてならぬ。

七時半(但しアデス・アベバ時間はデブチ時間より四十分遅らされて居る)夕食。少しはアビシニア料理でも出るかと期待して居たのが全く歐風而も多少墮落したらしい不美味い歐風料理で失望させられたが、不平の云ひ様もなく、九時半疲れて就寢。

バシヤワラッド君の話しによれば、アデス・アベバの人口は精確には解らないが約十萬人はある、而して外國人としては希臘人、アルメニア人、伊太利人が多く、佛蘭西人も英國人も獨逸人もそう多くは居ないとのことであつた。

八月二十四日、九時起床。朝食はパン、牛乳、珈琲、ジャム、卵子の眼鏡焼と云つたもので、之れも全く歐風である。

十時銀行へ行く、アビシニア銀行(Bank of Abyssinia)と云ふ。英貨五磅を出してアビシニ

アの銀貨一八ターレル(Thaler)を得た。大きな銀貨なので喰ふ。標本として二三持ち歸つたが、よい記念になつたと思ふ。

町の中をぶら／＼散歩する。大觀してエチオピアの首府たる此のアチス・アベバの町は先づ日本で言へば一寸賑かな田舎の村位としか思はない。殊に今は雨期である精もあらうが、道は到底も悪く、敷石のある部分もあつたがさ／＼して居て柔かな感じがな。

市場に行つて見る。此所は可なり面白い。野菜類ではトマト、馬鈴薯、薩摩薯、唐辛子などが見られる。銀細工を賣るものがあるが、大したものはない。技術は何れも拙劣なものばかりである。陶器類を商ふものがあるが、之れは支那からの輸入品らしく、而も拙劣な安物ばかりである。土人の日用品としてはそれでいいのである。硝子製品が列べられて居る。之れとて到底も拙い安物である。日本製品でないかと思はれる。唐辛子粉を賣るものが可なり多いのは流石にアビシニアだと思はせる。唐辛子粉はア

ビシニア料理には無くて叶はぬものなのである。御寺に行つて見る。サン・ジョルジ(S. George's)と云ふ。エチオピアの御寺としては可なりいい御寺だと思ふ。唯餘り新らしくて興味が引かれないのも止むを得ない。

エチオピアのキャフエーに入つて見る。此の國特有の飲料を飲むものがあるが我々には一寸手が出せない。音樂を奏するものがある。樂器は一絃で極く簡單なものであるがその音調たるや實に單調そのものである。

内部の具器類はと見渡す。先づ驚くことは、話で聞き物に讀んでは居たが、蜂蜜が羊か牛の皮の容器に入れられて居るのである。飲料水は流石に水壺に入れられて居る。椅子の古拙な簡單なのが置かれて居るのは不思議でないとしてカフエーに紡績機が置かれて居るのは、御客のない時副業でもやるのか。土産の日傘は萱草か何かで組まれたもので形は日本の傘などより遙かに小さく菅傘位であるが、稍饅頭形にふくらみ而もそれに木か竹の柄が着いて居るのだから大

第十九圖

分變つて居る。土間に一種の蘭草の青い儘のもの敷いて居るのは正に疊の原始的形態であり



雨期であるから致方ないとは云へ、餘り氣持よくは感ぜられない。
十二時過宿に歸り中食を攝る。多くの白人達

門口に一種の暖簾が掛けられて居るの懐かしい。唯家の中が一體にグリーミーであるのは、

第二十圖

が食卓に就いて居る。泊りの客ではなく食事丈けしに来る顧客らしい。何れは領事館か商館かの勤め人であらうが概して人品は本國歐羅巴人のそれに劣るのが目立つ。



食後又町に出て寫眞を撮る。然し何れも失敗であつたのは残念である。三時半おやつに歸り四時再び外出寫眞を撮るため又市場に行く。

羊や驢馬を引いて行くものがあり(第十九圖)
 羊や牛の肉を賣るものもあり、鹽、(第二十圖)
 綿、玉蜀黍、小麥、豆等を商ふ者もあり、(第
 二十一圖)それら商品の大部分は地面に擴げた
 アンペラ様の敷物の上に列べられて居る。かと

第廿一圖



思ふと
 市場の
 雑沓を
 見下す
 一段高
 い石垣
 の上で
 何人か
 の所の
 女が髪
 を結は
 せて居
 るのを
 見る。

第廿二圖

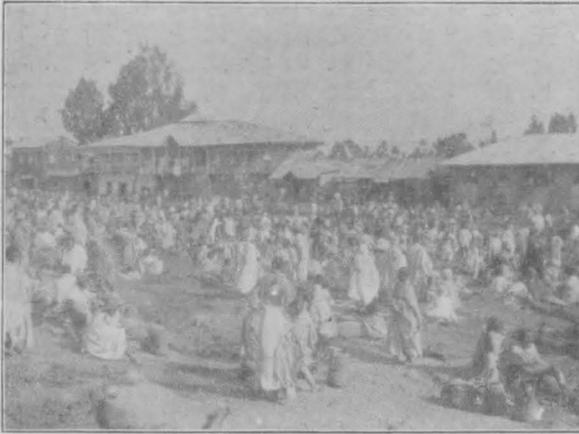


女は皮膚が黒く體格は瘠せ形であるが、身體の
 均整はとれ容貌は整ひ、若し彼等を漂白し美衣
 をまとはしめたならば正に楚楚たる稀世の美人
 となるにと思はれる位である。脱線したが、市
 場には相不變唐辛子を列べるものが多く、又一

アピシ
 ニアの
 女は自
 分の見
 る所で
 は更に
 黒い、
 平地に
 近いガ
 ラの女
 の如く
 美貌で
 はない
 ラガの

第 廿 三 圖

寸奇妙に思はれるのはユーカリブスの樹幹を割いたものや小樹皮などが薪として賣られて居ることであり(第二十二圖)、又布切や織物が商はれて居るが、此れは白木綿やその他の輸入品らしいやくざ物が多い。第二十三圖はアヂス・



アベバ
の市場
の大觀
であり
第二十
四圖は
市場を
離れた
静かな
一角に
日傘を
置いて
憩ふ女
達と荷

第 廿 四 圖



棒が一人の女商人から何か盗んで遁走するのを狂奔する彼女と多勢の人々々が追ひ舞はして到々捕まへたのを見たし、又泥棒は足を鐵鎖で繋ぐことになつて居るが、暫らくの見物中にも三人までの囚人を見たのである。

物を頭
上に戴
く女等
を示す
泥棒
は此の
土地に
も可な
り多い
らしい
自分の
見物中
にも一
人の泥

肉市場は殊に陰慘である。主として牛と羊との肉がひさがれるが、血の滴る様なのが吊されたり列べられたりしてゐる。それは何處の肉市場に於ても同様に違ひないが、人民に生肉を賜はると云ふアピシニア國王酒宴の記事を讀んだ自分には何かしら一層悽慘な風景として眺められたのである。

牛酪の市もある。買手は二三枚の木の葉を取つてこれに被せて行く。何でもないと云へばそれ迄だが、意味深い光景でもある。牛乳の市もあるが、これには廢物の葡萄酒の罎を利用して居る。

穀物を市場に運んで來るものに出會した。穀類は主として羊の皮で製つたサツクに容れられてゐる。流石に家畜の國だと思ふ。獸皮はそれ丈け豊富なのである。

此の地では土器は餘り使用せられぬものか、澤山は見當らないが、偶に赤味がかつた、又は黒味がかつた土器を見る。

以上は日と時と所を定めて開かれるアピシニ

ア土人の市場に就いての所見であるが、外國人の商人としては先づモハマラン會社(Mohammaharrah Co.)の人々が居り、可なり大きくやつて居るらしく、その他にも歐羅巴人が何軒かの商店を持つ外に、アラビア人、ヒンドウ人が尠なからず居つて商賣に従事して居る。固より大局から見れば微々たるものではあるが。

六時宿に歸る。前庭には日本の夾竹桃や菖蒲が咲いて居るのも懐かしく、乾季でも氣候はそう暑くはないだらうと想像せられるのである。梨や薔薇などまで見られる。

日記を記しながら、又休息しながら思ふ。今までに見た此の國土は、雨期である精にもよらうが、大體穢ならしく、經濟的には未だ少しも發達して居ない。土地は豊饒らしく見えるが之れを科學的に充分開發すべき知識の所有者が居ないのである。商業としては廣場の定市が殆んどその全部であるなど思ふ。

七時半夕食、九時就寢。非常に涼しく、九時の氣温が攝氏十二度である。(未完)